

がん薬物療法副作用管理マニュアル 第2版

吉村 知哲, 田村 和夫 監修/

川上 和宜, 松尾 宏一, 林 稔展, 大橋 養賢, 小笠原 信敬 編

＜書評者＞ 岩本 卓也 (三重大病院教授・薬剤部長)

「いかに副作用を軽減して治療を継続するか」。われわれががん薬物治療を開始する時に必ず考えることである。いくら最新のがん治療, エビデンスの高い治療であっても, 実際に治療に耐えることができればその恩恵を得ることはできない。また, がん治療に前向きな患者ばかりではなく, 副作用への心配から自ら治療の道を閉ざしてしまう方もおり, そのような患者に対しては一層丁寧な説明が必要になる。このような時, 実践に強い参考書, 副作用について素早く整理できる本が手元にあると心強い。本書は, 好評を博した初版の刊行から3年を経て, さらに内容を充実させた第2版であり, 医療従事者に求められる副作用管理のポイント, 経験に基づくアドバイスが随所に挿入された実践向けの本である。もちろん, 患者に要所を押さえた説明をする際にも最適である。

本書は, 抗がん薬投与後に発現する主な副作用を取り上げ, その発現率, 好発時期, リスク因子, 評価方法をまとめている。また, 典型的な症例提示もあり, 副作用アセスメントの進め方をイメージできる。そして, 第2版では, 「患者のみかたと捉えかた」を新設し, 腫瘍内科医が身体所見, 検査, 副作用の評価方法を記載しており, 診療の進め方を理解するのに役立つ。また, 各論では「味覚障害」「不妊 (性機能障害)」「栄養障害」が新たに追加され, 「免疫関連有害事象 (irAE)」の項目も充実している。

評者ならこの本を次のように活用する。担当患者に新たにがん薬物治療が適用されるとき, 抗がん薬による副作用を pp.8-10 の一覧表 (代表的な抗がん薬と副作用) で大まかに確認する。そして, 特に太字の副作用 (例えば, 血液毒性) については, 各論の副作用項

目 (例えば, 発熱, 血小板減少など) を参考に, 症状, リスク因子, 支持療法を確認し, 評価項目・方法についてプランを立てる。一方, 副作用が出現している場合には, 各論から原因となりそうな抗がん薬を推定していく。

本書の多くは, 診療に従事しているがん専門薬剤師により執筆されており, いわば, がん専門薬剤師の知を結集した本である。若手の薬剤師は本書を読めばきっと, 自信を持って処方提案ができるようになるはずだ。また, 副作用対策についてこれほどコンパクトにまとめられた書籍は他に見当たらず, 全ての医療職種にお薦めできる一冊である。ぜひ, 手元に置いて活用してほしい。

● B6 変型 頁 368 2021 年 3 月

定価: 本体 3,800 円 + 税

[ISBN978-4-260-04478-3]

医学書院刊